全訳 小林秀雄作品集

歿後六十周年記念出版

平井呈一 訳

全十二巻

恒文社

刊行のことば

この九月二十六日にラフカディオ・ハーンの六十周忌を迎えることになりました。といっても、今の若いゼネレーションには大きな感慨を呼び起こさないことでしょう。教科書にあった「耳なし芳一のはなし」の美しい英文で小泉八雲を覚えている人があるぐらいではないかと思います。それほど小泉八雲は、今の日本にとって遠い存在になっているのではないでしょうか。私はかねてよりそれを憂えているものです。

戦争という悪夢から醒め、戦後の虚脱状態を脱して約二十年、日本民族の再建は、世界の驚異といわれるほどのすばらしい速さで進み、今年はアジアで初めて開かれるオリンピック大会を東京に開催するまでになりました。今や日本はいろいろな意味で世界の注目の的になっています。

小泉八雲が一八九〇年に日本に来て、松江中学の教師として赴任し、日清戦争を経て、日露戦争勃発の年一九〇四年東京に急死するまでの、八雲が日本に生きた時期は、ある点で、戦後の日本の姿に似たものがあるのではないでしょうか。急激な経済的発展、極端な鎖国主義から開放された欧米尊重の風潮など、なにか一脈相通ずるものがあるように思われます。

万象の背後に心霊を見る八雲の哲学は、プラトーとダーウィンとスペンサーの思想に仏教の輪廻説を結合一丸としたものであるといわれています。その八雲が日本のもっとも古い姿の残っていた松江に住み、節子夫人を娶り、日本の地方生活に沈潜したことが、今日残されている八雲文学を生んだものといえましょう。

日本人の忘れていた、また知らなかった、日本の姿を日本人に教え、みずから身をもって行なったのが小泉八雲です。同時に、当時松江の人々の近づかなかった特殊部落「山の者」の住居を訪れ、主婦の汲んで出す茶を飲んだ八雲は、未来の社会に思いをいたすヒューマニストでもありました。それだけに、八雲が広く読まれることが、今日ほど必要とされたときはないと思います。

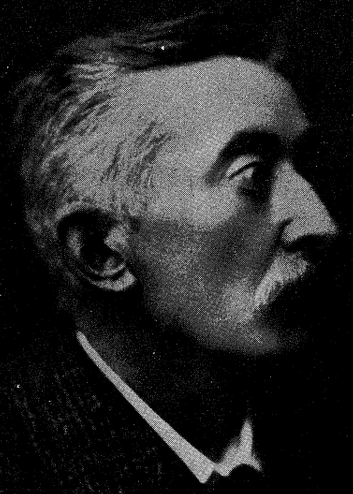
三十有余年前の中学生の頃に、当時の地方の中学としては珍しく充実した蔵書をもっていた新潟県立小千谷中学校の図書室で、ハーン全集を発見していらい、その幽幻の文字に魅せられた私は、機会あるごとに八雲の文献を集めてきました。そして出版者として、八雲全集の発刊は、私の宿願でもありました。

しかし八雲の文学は、その格調高い英文の美しさによって、世界的な評価を受けているものであります。それだけに、その翻訳は至難の業であります。今幸いに、私の母校の縁によって、訳者に平井呈一先生を得、また、ホートン社の限定出版「ラフカディオ・ハーン著作集」十六巻揃を入手、ここに全集刊行の運びとなったことを私は心から喜んでいます。

ラフカディオ・ハーンの全作品中、とくに日本に関するものを網羅し、それに東洋に関するものを加え、もって「全訳小泉八雲作品集」と名づけるしだいであります。

一九六四年四月

恒文社々長　池田恒雄



晩年の小泉八雲とその署名

刊行のことば

この九月二十六日にラフカディオ・ハーンの六十周忌を迎えることになりました。といっても、今の若いゼネレーションには大きな感慨を呼び起こさないことでしょう。教科書にあった「耳なし芳一のはなし」の美しい英文で小泉八雲を覚えている人があるぐらいではないかと思います。それほど小泉八雲は、今の日本にとって遠い存在になっているのではないでしょうか。私はかねてよりそれを憂えているものです。

戦争という悪夢から醒め、戦後の虚脱状態を脱して約二十年、日本民族の再建は、世界の驚異といわれるほどのすばらしい速さで進み、今年はアジアで初めて開かれるオリンピック大会を東京に開催するまでになりました。今や日本はいろいろな意味で世界の注目の的になっています。

小泉八雲が一八九〇年に日本に来て、松江中学の教師として赴任し、日清戦争を経て、日露戦争勃発の年一九〇四年東京に急死するまでの、八雲が日本に生きた時期は、ある点で、戦後の日本の姿に似たものがあるのではないでしょうか。急激な経済的発展、極端な鎖国主義から開放された欧米尊重の風潮など、なにか一脈相通ずるものがあるように思われます。

万象の背後に心霊を見る八雲の哲学は、プラトーとダーウィンとスペンサーの思想に仏教の輪廻説を結合一丸としたものであるといわれています。その八雲が日本のもっとも古い姿の残っていた松江に住み、節子夫人を娶り、日本の地方生活に沈潜したことが、今日残されている八雲文学を生んだものといえましょう。

日本人の忘れていた、また知らなかった、日本の姿を日本人に教え、みずから身をもって行なったのが小泉八雲です。同時に、当時松江の人々の近づかなかった特殊部落「山の者」の住居を訪れ、主婦の汲んで出す茶を飲んだ八雲は、未来の社会に思いをいたすヒューマニストでもありました。それだけに、八雲が広く読まれることが、今日ほど必要とされたときはないと思います。

三十有余年前の中学生の頃に、当時の地方の中学としては珍しく充実した蔵書をもっていた新潟県立小千谷中学校の図書室で、ハーン全集を発見していらい、その幽幻の文字に魅せられた私は、機会あるごとに八雲の文献を集めてきました。そして出版者として、八雲全集の発刊は、私の宿願でもありました。

しかし八雲の文学は、その格調高い英文の美しさによって、世界的な評価を受けているものであります。それだけに、その翻訳は至難の業であります。今幸いに、私の母校の縁によって、訳者に平井呈一先生を得、また、ホートン社の限定出版「ラフカディオ・ハーン著作集」十六巻揃を入手、ここに全集刊行の運びとなったことを私は心から喜んでいます。

ラフカディオ・ハーンの全作品中、とくに日本に関するものを網羅し、それに東洋に関するものを加え、もって「全訳小泉八雲作品集」と名づけるしだいであります。

一九六四年四月

恒文社々長　池田恒雄

■全訳 小泉八雲作品集の刊行に寄せて

谷川徹三

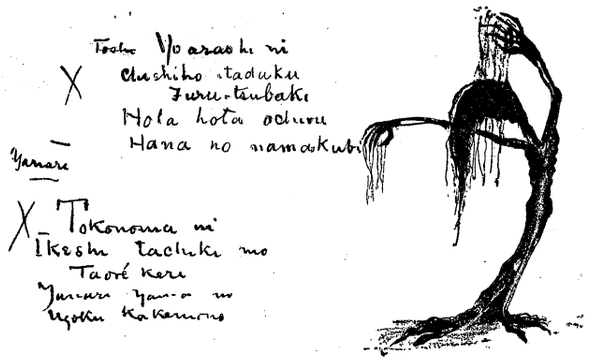
小泉八雲によって私は美しい日本のさまざまな姿を知った。日本人であるために、われわれの日常生活の中にあまりに身近にあるものは、みんながつい見過してしまう。そういうもののもつ何気ない美しさを、小泉八雲は、あらゆる生活の隅々から、澄んだ眼とこまやかな心とをもって、丹念に拾い集める。家の中で、寺や神社の境内で、旅行の途次に、家族や友人との交わりから、くさぐさの小工芸品や民話や歌謡や物語の中から。それによって世界中の人々が美しい日本を知った。

恐らく明治二十年代三十年代に日本を訪れた欧米人の何パーセントかは、小泉八雲の書物によって日本にあこがれて来たのではないかと私は思っているほどだが、その美しい日本については、それまで日本人自身も気づいていないことが多かったのである。私はその頃から何十年も経って、昭和の初めに、はじめて小泉八雲を読んだ。が、その私もそれまで気づいていなかったことが多かったのだ。

小泉八雲の描いたその美しい日本は、今や急速に姿を消しつつある。それは小泉八雲の日本にいた明治二十年代三十年代以来、時とともに消え去りつつあったが、戦後は一層の速度をもって消え去りつつある。しかしそれは今も全くなくなってはいない。三千年の歴史の蓄積がまたそんなに容易になくなるものでもないであろう。

私は徒らに昔を恋うる者ではない。日本はかつてあった美しい日本を失いつつあるが、かつてなかった美しい日本を築きつつある。現代の混乱はその過渡期の混乱である。混乱とは活潑に生き動いている証拠でもある。

しかし未来の美しい日本に望みをかけても、その美しい日本が、過去の美しい日本と無縁であるわけはない。一民族の生活も文化も生きものであるからには、また歴史がどんな断絶の中にも連続を保持するものであるからには、かつてあった美しい日本は現代にもその意味をもつはずである。われわれはその姿を見失ってはならない。その時小泉八雲はもう一度、否なお幾度も、われわれの前に立つであろう。



「古　椿」（八雲の遺稿）

小林秀雄

八雲の作品は、近頃ではいろんな教科書にまで載っているくらいだから、中学生でも知っている。この日本の恩人については、僕などの方がよっぽど不案内なくらいだ。現代のジャーナリズムが八雲の人及び作品をどう受け取っているかということになると、甚だ心許ない気がするが、こんど恒文社から出る全訳集によってそれが是正される機会に恵まれれば、幸いである。

日本を訪れた西欧人は数多いし、この国の文化の上に業績を残した人もたくさんいるが、彼ほど日本を愛した人はほかにあるまい。八雲の日本に関する作品には愛情を持つ人だけに可能な観察や批評がある。年譜によると、彼は明治二十三年に日本に渡来して、三十七年に東京で歿している。よい時期を彼は日本ですごした。古い伝統の形も新しい精神の形も、今日となってはとても考えられないような鮮明な姿をしていたであろう。

八雲は、われわれの父や母の生活に、その事を見てくれたわけである。西欧の物質文明に夙くから疑義をもった彼が、われわれの父や母たちの生活に何を見たかということは、今日のわれわれにとって興味あることであり、又、彼の眼より、今日の文化批評家の眼の方が鋭いとも誰にも言えないであろう。

こんどの平井氏の翻訳をたのしみにして読みたいと思っている。

山本健吉

日本を訪れた外国人のなかで、古美術や能楽や民芸や建築や――それらの伝統的な文化財に対して深い愛着を示した人は多い。フェノロサもクローデルも

推薦のことば

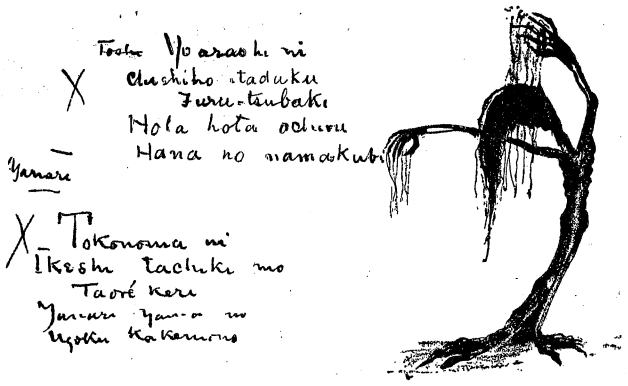
小林秀雄

八雲の作品は、近頃ではいろんな教科書にまで載っているくらいだから、中学生でも知っている。この日本の恩人については、僕などの方がよっぽど不案内なくらいだ。現代のジャーナリズムが八雲の人及び作品をどう受け取っているかということになると、甚だ心許ない気がするが、こんど恒文社から出る全訳集によってそれが是正される機会に恵まれれば、幸いである。

日本を訪れた西欧人は数多いし、この国の文化の上に業績を残した人もたくさんいるが、彼ほど日本を愛した人はほかにあるまい。八雲の日本に関する作品には愛情を持つ人だけに可能な観察や批評がある。年譜によると、彼は明治二十三年に日本に渡来して、三十七年に東京で歿している。よい時期を彼は日本ですごした。古い伝統の形も新しい精神の形も、今日となってはとても考えられないような鮮明な姿をしていたであろう。

八雲は、われわれの父や母の生活に、その事を見てくれたわけである。西欧の物質文明に夙くから疑義をもった彼が、われわれの父や母たちの生活に何を見たかということは、今日のわれわれにとって興味あることであり、又、彼の眼より、今日の文化批評家の眼の方が鋭いとも誰にも言えないであろう。

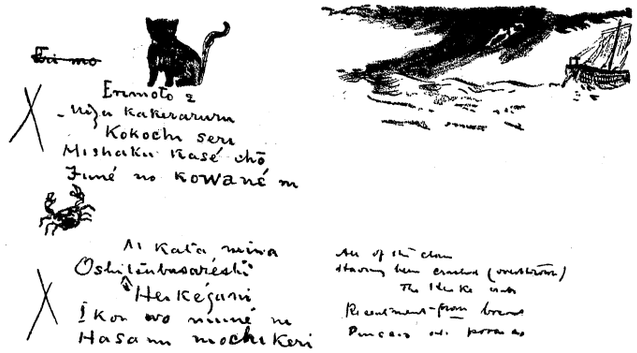
こんどの平井氏の翻訳をたのしみにして読みたいと思っている。



「古　椿」（八雲の遺稿）

山本健吉

日本を訪れた外国人のなかで、古美術や能楽や民芸や建築や――それらの伝統的な文化財に対して深い愛着を示した人は多い。フェノロサもクローデルも



「船幽霊」（八雲の遺稿）

リーチもタウトも、皆そうである。だが、ラフカディオ・ハーンになると、彼が一番心を惹かれたのは、日本の芸術ではなかった。日本人の「心」であり、「内面生活」であった。外からは一番捉えがたい、内奥にある隠微なものの影が、彼をもっとも惹きつけたのである。

そのために彼は日本に定住し、日本の婦人と結婚し、日本に帰化し、小泉八雲という日本人になった。ギリシャ人を母に持つ彼は、ギリシャに憧憬と郷愁とを抱き、近代のヨーロッパが失った古代ギリシャ的なものを、日本人の心の中に発見して讃嘆した。そしてその「心」が、もっとも純粋な美しさを保っているのは、日本婦人においてであった。西洋近代の個人主義の害毒を知っていた彼は、およそその反対のものを、日本婦人の没個性的な心情と仏教的な諦念とのなかに見出だした。

このハーンの日本観は、今日のわれわれには、あまりにロマンチックなものように見える。彼の描き出す日本は、あまりに古く、戦後の今日ではすべて崩壊して跡形もなくなったものばかりのように思える。ということは、彼が描き出した日本がすでに現代人には知らぬ異国のことのように思われかねないということだ。だが、それだからこそ彼の描き出した日本の姿を、今日改めて顧る必要があるのだと言えよう。それに、私たちの心の底に眠っているもの、時代や境遇の変化がどんなに大きくても、ついに動かすことのできない心の根底に潜むものが何であるかに、彼の作品は気づかせてくれるのである。

古くからハーンを敬慕する平井呈一氏の手で、今度新たに「全訳小泉八雲作品集」が出されることは、時期と言い人と言い、願ってもないことである。

表紙題字・小泉一雄氏筆

訳者のことば

平井呈一

八雲の翻訳を手がけだしてから、早いもので、かれこれもう三十年になる。こんど池田さんのような理解ある知遇をえて、この作品集が世に出ることになったことは、訳者としてこれにまさる喜びはない。全力をつくすつもりでいる。

いちど外国に遊んだもの世、自分の国のよいところと悪いところが改めてはっきりわかると、よくいわれる。生まれた国を離れて、異邦の文化のなかに親しく身をおいてみると、客観的に自他のよいところと悪いところが、正しいバランスで批判されるからだろう。

八雲の「ある保守主義者」の主人公は、欧米諸国を遍歴したのち、かえって自国に深い信頼をもった。

おもしろいことに、八雲の作品を読んだり翻訳したりしていると、しばしばこれと同じような心持を覚えることがある。八雲が「われわれ」といっているのは、いうまでもなく西欧人であって、それを読むわたしたちは、その西欧人である「われわれ」の思考に導かれて、日本の思想や伝統や風土を吟味していくのである。つまり、いちど西欧人の心を通して、日本を見ることになる。――いわば、読者は二重国籍人になって、自国の思想、人情、習俗、自然、歴史を吟味していくわけで、これは日本人の書いた日本観からはえられない、一種の思考上のエクゾティシズムともいえよう。こんにち、日本というものを国際線の上で対決させる必要に迫られているとき、八雲の作品が、もういちどぜひ味読されなければならない理由も、このへんにありはしないかとおもう。

自明のことをいうようだが、わたしの翻訳した八雲は、これはあくまでもわたしの八雲である。ほかの人がお訳しになれば、それはその人の八雲だ。悲しいかな、これは翻訳というものの限界であり、宿命であるように思われる。八雲にじかに触れるためには、みなさんは八雲の原書を読まれる以外に手はない。八雲がどれだけわたしにのりうつったか、その度合が問題だが、自分ではわからない。ただ、八雲を大きく謬っていなければよいがと、それのみを祈っている。

わたしの悪い癖で、これまで新しい版が出るたびに、そのつど旧訳に克明に手を入れてきたけれども、こんどこそはこの作品集のものを決定訳にする。

われわれの心のふるさとは、日に日に遠くなっていくようである。わたしどものとかく忘れがちな、心していたわるべきものが、八雲の書いたものの随所に、じつに心こまかに保存されている。その保存されているものの意味を、この際読者とともに、もういちどじっくりと考えていきたいと思う。

一九六四年四月

訳者のことば

平井呈一

八雲の翻訳を手がけだしてから、早いもので、かれこれもう三十年になる。こんど池田さんのような理解ある知遇をえて、この作品集が世に出ることになったことは、訳者としてこれにまさる喜びはない。全力をつくすつもりでいる。

いちど外国に遊んだものは、自分の国のよいところと悪いところが改めてはっきりわかると、よくいわれる。生まれた国を離れて、異邦の文化のなかに親しく身をおいてみると、客観的に自他のよいところと悪いところが、正しいバランスで批判されるからだろう。

八雲の「ある保守主義者」の主人公は、欧米諸国を遍歴したのち、かえって自国に深い信頼をもった。

おもしろいことに、八雲の作品を読んだり翻訳したりしていると、しばしばこれと同じような心持を覚えることがある。八雲が「われわれ」といっているのは、いうまでもなく西欧人であって、それを読むわたしたちは、その西欧人である「われわれ」の思考に導かれて、日本の思想や伝統や風土を吟味していくのである。つまり、いちど西欧人の心を通して、日本を見ることになる。——いわば、読者は二重国籍人になって、自国の思想、人情、習俗、自然、歴史を吟味していくわけで、これは日本人の書いた日本観からはえられない、一種の思考上のエクゾティシズムともいえよう。こんにち、日本というものを国際線の上で対決させる必要に迫られているとき、八雲の作品が、もういちどぜひ味読されなければならない理由も、このへんにありはしないかとおもう。

自明のことをいうようだが、わたしの翻訳した八雲は、これはあくまでもわたしの八雲である。ほかの人がお訳しになれば、それはその人の八雲だ。悲しいかな、これは翻訳というものの限界であり、宿命であるように思われる。八雲にじかに触れるためには、みなさんは八雲の原書を読まれる以外に手はない。八雲がどれだけわたしにのりうつったか、その度合が問題だが、自分ではわからない。ただ、八雲を大きく謬っていなければよいがと、それのみを祈っている。

わたしの悪い癖で、これまで新しい版が出るたびに、そのつど旧訳に克明に手を入れてきたけれども、こんどこそはこの作品集のものを決定訳にする。

われわれの心のふるさとは、日に日に遠くなっていくようである。わたしどものとかく忘れがちな、心していたわるべきものが、八雲の書いたものの随所に、じつに心こまかに保存されている。その保存されているものの意味を、この際読者とともに、もういちどじっくりと考えていきたいと思う。

一九六四年四月

■全訳 小泉八雲作品集全十二巻の内容

第一巻　印象派作家日記抄　クリオル小品集　中国怪談集〈第九回配本〉

フロリダ幻想曲　夢の都　クリオル人の典型　川越しの会話　クリオル・ミステリー　夜明けの声　大鐘の霊　織姫の伝説　陶神譚　その他

年譜にもあるように、ハーンは日本へくる前、一八七四年から十数年間をアメリカで過ごし、オハイオ州のシンシナティーやルイジアナ州のニュー・オーリンズで新聞記者をしていました。第一巻から第四巻までは、その期間の若いロマンチシストとしてのハーンの絢爛たる文才が、異郷の強烈な風土のなかで開花した異色ある収穫をあつめたものです。従来日本に取材した後年の八雲の作品にのみ接してこられた読者には、いかにも鬼才という名にふさわしいこれら初期の作品は、まるで魔教の薫香にもたぐうようなその神秘で妖異な香気に、おそらく魂をしびれさすことでしょう。

「クリオル小品集」はフランス人の移民である、いわゆるクリオル人の異様な風俗を活写したスケッチ集ですが、「怪奇なもの、世にも不思議なもの」をひたすらに漁り求めたハーンの若い詩魂は、これらの土俗的豆絵（ミニアチュア）のなかに鬼火のように妖しく発光しています。「中国怪談集」は、ハーンの東洋に対する夢とあこがれのいみじき交配によって実を結んだ、美神の夢魔のような作品で、その精練された瑰麗な文章は、フランス浪曼派の驍将ゴーチェを模して、天才ポーの文体を摩するものがあるといわれています。晩年の「怪談」や「骨董」の母胎となったものをさぐる意味でも、ハーニアンの当然詣ずべき第一の聖地であろうと考えられます。

第二巻　飛花落葉集　きまぐれ草〈第八回配本〉

泉の乙女　鳥妻　屍鬼　夜摩王　愛の伝説　悪魔の紅玉　幽霊の接吻　死んだ恋人　その他

世に「奇想の子（アンファン・ファンタジック）」ということばがあるとしたら、「飛花落葉集」と「きまぐれ草」は、まさにその「奇想の子」がかき鳴らした世にも不思議な鎮魂曲でしょう。エジプトの古書、インドの経典、ペルシャの古譚、カレワラ、バカワリなど、世界の珍籍古譚のなかから、ハーンが妖異なファンタジーを古怪な文章に結びとめたのが、この集です。その珍しさは内容と相まって、世界文学のなかの珍羞というに憚りないものと思われます。

同じ頃の作品集である「きまぐれ草」は、これもハーンらしいユニークなもので、地方新聞の片隅を埋めた片々たる雑文にすぎませんが、まるで宝石箱をペルシャ絨氈の上にぶちまけたような、絢爛目を奪うばかりの詩と散文の放恣な乱舞であります。とかく合理主義万能の索漠たる今日、この一巻は詩とロマンの香り豊潤な霊薬として、忘れていた陶酔をよびもどしてくれるに違いありません。

第三巻・第四巻　仏領西インドの二年間　チタ　ユーマ〈第十回、第十一回配本〉

熱帯への旅　マルチニーク・スケッチ　チタ　ユーマ

ハーンの生涯の心友であった、言語学者で日本学者のチェンバレンは、ハーンの三大傑作として、この「仏領西インドの二年間」と「日本瞥見記」と「日本――一つの試論」をあげています。さすがに深い理解と友情から発した、狂いのない卓見であります。「仏領西インドの二年間」に示されたハーンの豊饒的確な観察と、新鮮な達文とは、世界の紀行文学のなかでも異色あるもので、じつはこの紀行が受けたところから、版元のハーパー社がさらに次の成功を実現すべく、ハーンを日本へ派遣したという因縁つきの作品で、そういえば、「日本瞥見記」とは、いわば文明のとどかない秘境探訪のおもしろさという共通点があるようにもおもわれます。「チタ」は、ニュー・オーリンズに近いメキシコ湾の一孤島が、一夜のうちに強風のために壊滅した災害を背景に、島の漁民が漂流した赤子を拾って育てるという人情談で、風物と季節の活写は、「ユーマ」とともにしばしばピエル・ロチの「氷島の漁夫」に比べられる名作です。この二篇の中篇小説を置土産にして、ハーンはアメリカをあとに、待望の日本へ渡来したのでした。

第五巻・第六巻　日本瞥見記（上・下）〈第二回、第三回配本〉

極東第一日　江の島巡礼　盆おどり　神国の首都――松江　杵築　潜戸　日本の庭　英語教師の日録　日本海に沿うて　舞妓　日本人の微笑　その他

一八九〇年（明治二十三年）四月に、ハーンははじめて日本に渡来しました。一ジャーしたが、一年で退学した。前のアショー学校も、このイヴトーの学校も、ともにローマ旧教の学校で、形式的な規則がきびしく、懲罰が苛酷にすぎるので、居たたまれなかったのである。ラフカディオが後年、ローマ旧教を蛇蝎のごとく嫌ったのは、少年時代のこの学校生活の経験で、僧侶の偽善と信仰の虚偽が身にしみていたからであった。

一八六九年（明治二年）　19歳　独立を志して、モリヌーク家の縁者のいるオハイオ州のシンシナティーをさして、ひょうぜんとアメリカに渡る。渡米後まもなく大叔母が死んで送金が絶え、異郷にあって天涯孤独となったラフカディオは生活の道に窮し、あるときは印刷屋の食客となり、あるときは小新聞社の広告とりや校正係となるなど、職をかえること十数回、貧乏はその極に達し、世路の辛酸をつぶさになめた。

一八七四年（明治七年）　24歳　シンシナティーの新聞、「インクワイヤラー」の記者となる。この新聞で、「革工場殺人事件」「尖塔登はん記」などの新奇な探訪記事を書いて、文才を認められた。この年、出資者を見つけて、友人の画家と共同で「イー・ジグランプス」という絵入り諷刺の日曜新聞を発刊したが、八号でつぶれた。

一八七六年（明治九年）　26歳　「シンシナティー・コンマーシャル新聞社」に転勤し、ここでは歿後「東西文学評論」「アメリカ雑稿」に収められたかずかずの文芸評論や小品を書いて、特異な文才を発揮した。生活もやや安定し、東西の奇書珍籍を漁っては耽読するかたわら、ヨーロッパの新しい文学の紹介につとめた。フランスのゴーチェに傾倒して、その翻訳を発表したのもこの頃であった。

一八七七年（明治十年）　27歳　繁忙な新聞社生活に疲れ、十月、コンマーシャル社を辞して、

■小泉八雲年譜

一八五〇年（嘉永三年）　六月二十七日ギリシャのリュカディア島に生まれ、パトリシオ・ラフカディオ・カシマチ・チャールズ・ハーンと名づけられた。父チャールズ・ハーンはアイルランド生まれのイギリス陸軍軍医、母ローザ・カシマチはギリシャ人で、島に駐留中のチャールズと恋に落ちて結婚したのである。長男は夭折し、ラフカディオは二男であった。

一八五一年（嘉永四年）　1歳　父が西インドへ転任するので、七月、母とともに父の故郷アイルランドのダブリンへ移る。

一八五三年（嘉永六年）　3歳　父が病気のため、任地先からダブリンにもどってきた。

一八五六年（安政三年）　6歳　父母が離婚した。ラフカディオは大叔母ブレネン夫人のもとに引きとられる。翌年、父はむかしの愛人と結婚する。この間の暗い家庭の空気は、幼いラフカディオの感じやすい心に大きな影響をあたえた。離婚された生母に対する深い思慕は、終生、ラフカディオの女性観に影響し、後年日本の女性を礼讃したのも、これにつながるものと考えられる。

一八六三年（文久三年）　13歳　カトリックのアショー学校に入学。生まれつき強度の近視眼だったラフカディオは、この学校で、友だちと遊戯中に左眼を失明した。

一八六六年（慶応二年）　16歳　親戚モリヌーク家の破産で大叔母も巻添えをくったので、アショー学校を退学する。この年十一月に、父チャールズ死去。

一八六七年（慶応三年）　17歳　親戚の援助でフランスのルーアンに近いイヴトーの学校に入学

ら、ハーンが妖異なファンタジーを古怪な文章に結びとめたのが、この集です。その珍しさは内容と相まって、世界文学のなかの珍羞というに憚りないものと思われます。

同じ頃の作品集である「きまぐれ草」は、これもハーンらしいユニークなもので、地方新聞の片隅を埋めた片々たる雑文にすぎませんが、まるで宝石箱をペルシャ絨氈の上にぶちまけたような、絢爛目を奪うばかりの詩と散文の放恣な乱舞であります。とかく合理主義万能の索漠たる今日、この一巻は詩とロマンの香り豊潤な霊薬として、忘れていた陶酔をよびもどしてくれるに違いありません。

第三巻・第四巻　仏領西インドの二年間　チタ　ユーマ〈第十回、第十一回配本〉

熱帯への旅　マルチニーク・スケッチ　チタ　ユーマ

ハーンの生涯の心友であった、言語学者で日本学者のチェンバレンは、ハーンの三大傑作として、この「仏領西インドの二年間」と「日本瞥見記」と「日本――一つの試論」をあげています。さすがに深い理解と友情から発した、狂いのない卓見であります。「仏領西インドの二年間」に示されたハーンの豊饒的確な観察と、新鮮な達文とは、世界の紀行文学のなかでも異色あるもので、じつはこの紀行が受けたところから、版元のハーパー社がさらに次の成功を実現すべく、ハーンを日本へ派遣したという因縁つきの作品で、そういえば、「日本瞥見記」とは、いわば文明のとどかない秘境探訪のおもしろさという共通点があるようにもおもわれます。「チタ」は、ニュー・オーリンズに近いメキシコ湾の一孤島が、一夜のうちに強風のために壊滅した災害を背景に、島の漁民が漂流した赤子を拾って育てるという人情談で、風物と季節の活写は、「ユーマ」とともにしばしばピエル・ロチの「氷島の漁夫」に比べられる名作です。この二篇の中篇小説を置土産にして、ハーンはアメリカをあとに、待望の日本へ渡来したのでした。

第五巻・第六巻　日本瞥見記（上・下）〈第二回、第三回配本〉

極東第一日　江の島巡礼　盆おどり　神国の首都――松江　杵築　潜戸　日本の庭　英語教師の日録　日本海に沿うて　舞妓　日本人の微笑　その他

一八九〇年（明治二十三年）四月に、ハーンははじめて日本に渡来しました。一ジャーしたが、一年で退学した。前のアショー学校も、このイヴトーの学校も、ともにローマ旧教の学校で、形式的な規則がきびしく、懲罰が苛酷にすぎるので、居たたまれなかったのである。ラフカディオが後年、ローマ旧教を蛇蝎のごとく嫌ったのは、少年時代のこの学校生活の経験で、僧侶の偽善と信仰の虚偽が身にしみていたからであった。

一八六九年（明治二年）　19歳　独立を志して、モリヌーク家の縁者のいるオハイオ州のシンシナティーをさして、ひょうぜんとアメリカに渡る。渡米後まもなく大叔母が死んで送金が絶え、異郷にあって天涯孤独となったラフカディオは生活の道に窮し、あるときは印刷屋の食客となり、あるときは小新聞社の広告とりや校正係となるなど、職をかえること十数回、貧乏はその極に達し、世路の辛酸をつぶさになめた。

一八七四年（明治七年）　24歳　シンシナティーの新聞、「インクワイヤラー」の記者となる。この新聞で、「革工場殺人事件」「尖塔登はん記」などの新奇な探訪記事を書いて、文才を認められた。この年、出資者を見つけて、友人の画家と共同で「イー・ジグランプス」という絵入り諷刺の日曜新聞を発刊したが、八号でつぶれた。

一八七六年（明治九年）　26歳　「シンシナティー・コンマーシャル新聞社」に転勤し、ここでは殁後「東西文学評論」「アメリカ雑稿」に収められたかずかずの文芸評論や小品を書いて、特異な文才を発揮した。生活もやや安定し、東西の奇書珍籍を漁っては耽読するかたわら、ヨーロッパの新しい文学の紹介につとめた。フランスのゴーチェに傾倒して、その翻訳を発表したのもこの頃であった。

一八七七年（明治十年）　27歳　繁忙な新聞社生活に疲れ、十月、コンマーシャル社を辞して、

ナリストとして日本の土を踏んだハーンは、あこがれの日本の風土と人情にすっかり魅せられて、ここを墳墓の地とさだめ、日本婦人を妻にめとってこの国に帰化し、名前も小泉八雲と改めました。爾来滞日十有数年、その間に著わした日本に関するかずかずの著書は、一作の世に出づるごとに世界の関心をあつめ、「知られざる日本」の様相は八雲の麗筆によってはじめて海外に広く紹介されたのであります。八雲の著書に導かれて日本を訪れる外国観光客が、年を追うてきめき増加したことが当時の記録にのこっています。

「日本瞥見記」上下二巻は、八雲としては渡日後の第一作だけあって、印象がきわめて新鮮で、筆もみずみずしく、犀利な観察と理解しようとする深い関心とは、どんな些細なものにも意味を見いだし、問題を提起している点、こんにちこれを読んでも少しも時代的な隔たりが感じられず、かえって碧眼の一異邦人に案内されながら、われわれの遠い父祖の生活を偲びつつ、居ながらにして歴史と風土への小旅行をこころみている愉しさがあり、おのずから伝統というものの意味、ひいては民族のこころというようなものを、西欧人の目を通してあらためて考えさせられる思いがします。人づくり国づくりが事新しく叫ばれている今日、「日本瞥見記」の示唆するものは、けっして単なる懐古とか復古ではなく、われわれの背骨をそこにさぐりあてるという意味で、それは昨日への穏健な批判であると同時に、明日への剴切な指針となるもののように思われます。

第七巻　東の国から　心〈第四回配本〉

九州の学生たち　永遠の女性　石仏　柔術　赤い婚礼　勇子　日本文化の真髄　ハル　ある保守主義者　きみ子　その他

日清戦争を契機として、若い日本が世界史の上に大きく躍進した転換期に書かれたこの二著は、日本人の精神形成を近代との接点の上でとらえているところに、いろいろ意味深いものを提出しています。若い日本がはじめて経験した戦争という大きな試練のなかで発揮したものに、八雲は深く感動し、さらに戦勝国日本の成長のために鋭い警告を発しています。

「東の国から」は、そうした国民的な緊張のなかで、八雲が熊本という日本でも有数な封建色の濃い風土から、日本的性格の正体を見究めようとした随想集で、代表的な名篇「柔術」のごときは、日本人の精神形成をみごとに象徴した卓見として、西欧に喧伝されました。当時の米大統領はこの一巻を読んで、日本および日本人を知る必読の書として、海軍省に命じ将卒に読ませたと伝えられています。

光と風と小鳥の歌を求めて、ニュー・オーリンズへ行く。当分はコンマーシャル社に紀行や印象記を寄稿した。

一八七八年（明治十一年）　28歳　ニュー・オーリンズの「デイリー・アイテム社」に入り、まもなく副主事に栄進した。この新聞は創刊まだ日も浅かったが、ハーンの入社以来、記事に新風を送り、しだいに面容をあらためた。南方の風物はハーンの気に入り、物価も安く生活がらくなので、多少の貯えもできた。それに力をえて、一日も早く記者生活から足を洗って、自由な文筆生活に入りたいと念じ、それにはすこし金儲けをしようと、柄にもない野心をおこしてかかったのが“Hard Times”（不景気屋）という「何でも市価の半額、五セント食堂」の開業であった。しかし、たちまち失敗。共同者とコックが儲けをかっさらって逃げたのである。

一八八一年（明治十四年）　31歳　「タイムス・デモクラット社」に文芸部長として招聘される。ハーンはもっぱら随筆、翻訳を執筆し、モーパッサン、アナトール・フランス、ピエル・ロティ、フローベル、コッペ、ド・ネルヴァルなどのフランス文学から、ツルゲーネフ、ドストエフスキーに及ぶ二百篇近い作品を翻訳した。外国文学の翻訳について、ハーンは「原作を愛好するのあまりに翻訳する人は、自分がりっぱな翻訳をして、つまらぬ人の手にかからないように、文学を保護するという満足に生きるのだ」といっている。

一八八二年（明治十五年）　32歳　ゴーチェの「クレオパトラの一夜」を翻訳出版した。文名ようやく揚がる。

一八八四年（明治十七年）　34歳　Stray Leaves from Strange Literature「飛花落葉集」を出版。エジプト、インド、フィンランド、アラビアなどの伝説・物語に材をとった、ハーンの異

「心」は、八雲が熊本から神戸に移った時期に書かれたもので、八雲は当時の日本の欧化を心から憂慮し、日本の持てるよきものを失ってはならないと声を大きくして警め、東西文化のきびしい比較を中心に、いろいろの角度から日本への深い愛情を披瀝しています。

またこの両巻には、「永遠の女性」「赤い婚礼」「勇子」「ハル」「きみ子」のような日本の女性に対する礼讃や、「前世の観念」「祖先崇拝の思想」のような、われわれの精神的基盤を構成している神道と仏教思想を解明した力篇のあることも特筆すべきでしょう。

第八巻　仏の畑の落穂　異国風物と回想〈第五回配本〉

生神　京都旅行　日本美術の顔について　大阪　勝五郎再生記　虫の音楽家　死者の文学　蛙　その他

わたくしたちの内外生活の地底には、古くから仏教の泉が流れています。「仏の畑の落穂」では、八雲は庶民の迷信、民謡俗歌など、われわれのごく身近にある日常の些細なものから、ふだんわれわれの見すごしているものの意味を闡明しようとしています。そしてこのあたりから、かれの物質万能・機械万能の近代への嫌悪と訣別がはじまりだして、自然への復帰、現世的なものよりも過去の記念物、ひいては古典のなかに、自分の求める東洋的理想をさぐる傾向が強くなってきたようです。

「虫の音楽家」や「蛙」は、のちの「トンボ」「蟬」「螢」「蝶」などとともに、小動物を愛した八雲の風流随筆ですが、そこには東洋的な自然観照に対する八雲の共感がはっきりと打ち出されています。野にすだく一匹の虫からも、われわれの迂濶にしている伝統や因習を示してくれるところに、こうした八雲の随筆のおもしろさがあるのではないでしょうか。

第九巻　霊の日本　明暗　日本雑記〈第七回配本〉

断片　振袖　香　恋の因果　小さな詩　焼津で　和解　衝立の乙女　蟬　果心居士　梅津忠兵衛　日本のわらべ歌　おだいの場合　乙吉だるま　その他

霊魂の問題は、深遠な人間学の究極問題として、八雲の生涯を通じての最大の関心事でした。八雲の怪談も、じつはこうした霊魂への関心につながる一連の文学的述作なのであ

才を発揮した天下の奇書である。――この年、ニュー・オーリンズ市百年祭記念博覧会が開催され、日本から派遣された事務官服部一三に会う。

この服部が、後年、ハーンが日本へきたとき、かれを松江中学校へ斡旋したのだから奇縁である。――夏、メキシコ湾内のグランド島に遊び、小説「チタ」の材料をえた。

一八八七年（明治二十年）　37歳　Some Chinese Ghosts「中国怪談集」出版。この年、友人に勧められてハーバート・スペンサーの「第一原理」を読み、思想が根本的に変ったほどの大きな影響をうける。そして、みずからスペンサーの弟子と号して、終生、その思想に直入した。ハーンはこれに仏教の輪廻観を加味して、独自の世界観を打ちたてたのである。――ハーパー書店との契約ができて、ハーパース・マガジンに旅行記を寄稿するために、仏領西インドに赴く。

一八八八年（明治二十一年）　38歳　小説「チタ」がハーパース・マガジンに掲載される。

一八八九年（明治二十二年）　39歳　西インド、マルティニーク島で書いた小説「ユーマ」の出版交渉のことで、ニューヨークに行き、ハーパース・マガジンの美術主任のパットンと知り合う。パットンは日本美術に造詣が深く、この人との話から、ハーンは日本漫遊の実現をまじめに考えはじめた。

一八九〇年（明治二十三年）　40歳　小説「ユーマ」「仏領西インドの二年間」出版。――日本行きの話、しだいに熟す。ハーパー社との間にいろいろ曲折があったのち、ついに日本行きが決定し、ほんの四、五カ月の漫遊のつもりで、三月五日、ニューヨークを出帆、四月四日、横浜に着く。――八月、島根県松江中学校に英語教師として赴任。九月より出校。この月十五日、杵築大社に参拝、外国人として最初の昇殿を許

「心」は、八雲が熊本から神戸に移った時期に書かれたもので、八雲は当時の日本の欧化を心から憂慮し、日本の持てるよきものを失ってはならないと声を大きくして警め、東西文化のきびしい比較を中心に、いろいろの角度から日本への深い愛情を披瀝しています。

またこの両巻には、「永遠の女性」「赤い婚礼」「勇子」「ハル」「きみ子」のような日本の女性に対する礼讃や、「前世の観念」「祖先崇拝の思想」のような、われわれの精神的基盤を構成している神道と仏教思想を解明した力篇のあることも特筆すべきでしょう。

第八巻　仏の畑の落穂　異国風物と回想〈第五回配本〉

生神　京都旅行　日本美術の顔について　大阪　勝五郎再生記　虫の音楽家　死者の文学　蛙　その他

わたくしたちの内外生活の地底には、古くから仏教の泉が流れています。「仏の畑の落穂」では、八雲は庶民の迷信、民謡俗歌など、われわれのごく身近にある日常の些細なものから、ふだんわれわれの見すごしているものの意味を闡明しようとしています。そしてこのあたりから、かれの物質万能・機械万能の近代への嫌悪と訣別がはじまりだして、自然への復帰、現世的なものよりも過去の記念物、ひいては古典のなかに、自分の求める東洋的理想をさぐる傾向が強くなってきたようです。

「虫の音楽家」や「蛙」は、のちの「トンボ」「蟬」「螢」「蝶」などとともに、小動物を愛した八雲の風流随筆ですが、そこには東洋的な自然観照に対する八雲の共感がはっきりと打ち出されています。野にすだく一匹の虫からも、われわれの迂濶にしている伝統や因習を示してくれるところに、こうした八雲の随筆のおもしろさがあるのではないでしょうか。

第九巻　霊の日本　明暗　日本雑記〈第七回配本〉

断片　振袖　香　恋の因果　小さな詩　焼津で　和解　衝立の乙女　蟬　果心居士　梅津忠兵衛　日本のわらべ歌　おだいの場合　乙吉だるま　その他

霊魂の問題は、深遠な人間学の究極問題として、八雲の生涯を通じての最大の関心事でした。八雲の怪談も、じつはこうした霊魂への関心につながる一連の文学的述作なのであ

才を発揮した天下の奇書である。――この年、ニュー・オーリンズ市百年祭記念博覧会が開催され、日本から派遣された事務官服部一三に会う。

この服部が、後年、ハーンが日本へきたとき、かれを松江中学校へ斡旋したのだから奇縁である。――夏、メキシコ湾内のグランド島に遊び、小説「チタ」の材料をえた。

一八八七年（明治二十年）　37歳　Some Chinese Ghosts「中国怪談集」出版。この年、友人に勧められてハーパート・スペンサーの「第一原理」を読み、思想が根本的に変ったほどの大きな影響をうける。そして、みずからスペンサーの弟子と号して、終生、その思想に直入した。ハーンはこれに仏教の輪廻観を加味して、独自の世界観を打ちたてたのである。――ハーパー書店との契約ができて、ハーパース・マガジンに旅行記を寄稿するために、仏領西インドに赴く。

一八八八年（明治二十一年）　38歳　小説「チタ」がハーパース・マガジンに掲載される。

一八八九年（明治二十二年）　39歳　西インド、マルティニーク島で書いた小説「ユーマ」の出版交渉のことで、ニューヨークに行き、ハーパース・マガジンの美術主任のパットンと知り合う。パットンは日本美術に造詣が深く、この人との話から、ハーンは日本漫遊の実現をまじめに考えはじめた。

一八九〇年（明治二十三年）　40歳　小説「ユーマ」「仏領西インドの二年間」出版。――日本行きの話、しだいに熟す。ハーパー社との間にいろいろ曲折があったのち、ついに日本行きが決定し、ほんの四、五カ月の漫遊のつもりで、三月五日、ニューヨークを出帆、四月四日、横浜に着く。――八月、島根県松江中学校に英語教師として赴任。九月より出校。この月十五日、杵築大社に参拝、外国人として最初の昇殿を許

って、かれの怪談がただの低俗な怪奇趣味をこえた、りっぱな文学作品になっているのも、そのためでありましょう。「明暗」や「日本雑記」にある古典の翻案も、八雲の求めたものは、この「人間的なもの」だったはずです。「和解」以下「興義和尚」にいたる諸篇は、最後の「怪談」「骨董」の名篇に昇華するまでの、その道程における試作でありますが、原作にないヒューマンなものが加わっている点を見逃してはならないとおもいます。

第十巻　骨董　怪談　天の川綺譚〔第一回配本〕

幽霊滝の伝説　茶わんのなか　生霊　死霊　忠五郎のはなし　ある女の日記　螢　露のひとしずく　耳なし芳一のはなし　おしどり　お貞のはなし　ろくろ首　雪女　鏡の乙女　その他

八雲といえば怪談、怪談といえば八雲といわれるほど、八雲の「怪談」は広く世に知られています。その八雲の「日本怪談」は、晩年の「骨董」「怪談」に至って、渾然たるものに完成しました。これらのものにはみな粉本があります。その粉本の多くは江戸時代の通俗な巷説的怪談本ですが、八雲はただそれを逐次訳したのでもなければ、自由訳にしたのでもありません。骨だけを原作にかり、あとは八雲が創作したのであります。八雲がどのように換骨奪胎したか、なにを骨にのこし、なにを肉に加えて血をかよわしたか、ここに東西精神の文学的交易が見られるわけで、しかもそれが前にも申したように、かれ独特の霊魂研究につながる日本研究の重要な一部門であるところに、かれの怪談は日本人の生ある限り、永遠の生命をもつともいえるでしょう。参考資料として、八雲が用いた粉本を巻末に添えておきましたから、それを比較対照していただくと、さまざまの興味ふかい問題がそこから引きだせるとおもいます。

第十一巻　日本――一つの試論〔第六回配本〕

古代の祭り　家庭の宗教　日本の家族　神道の発達　仏教の渡来　忠義の宗教　その他

八雲の終生の大著である「日本――一つの試論」は、八雲の日本研究の集大成とも卒業論文ともいわれている世界的名著の一つですが、文字どおり粉骨縷骨のこの労作のために八雲は命をちじめ、この本の校正なかばに急逝しました。この書が一九〇四年（明治三十七年）に英米で出版されたとき、アメリカは、当時日露戦争後の新鋭国日本の研究のために、これを陸海軍士官の教科書に採用し、また今次大戦の際にも、青年士官の必読の書として推薦したという事実を見ても、この書が永遠の名著であることがわかります。わが国では、戦時中、この本は軍部の血ぬられた手によって、まちがった意味での国威発揚の宣伝に悪用されました。

外国人の書いた日本国民精神史として、群書中の白眉であるこの本は、今こそもういちど新しい目をもって改めて読み直されるべき時かとおもわれます。この本を味読、批判することは、とりもなおさず、われわれ日本人の心と肉体のなりたちに思いを致すことであり、国際人としてのわれわれを形づくっていく上に、多くの示唆と指針をあたえてくれるものと信じます。とくに若い世代の方々に、ぜひ一読していただきたいものだとおもいます。

第十二巻　小泉八雲伝〔第十二回配本〕

この日本の大恩人であるハーンの生涯は、その出生からしてすでに特異なものをはらんでいました。富裕な大叔母の手に育てられた、母のない少年時代の傷心、アメリカ時代の苦しい放浪と生活苦にあえいだ青年期、ようやくあこがれの日本に渡来してからの芸文ひとすじの生活――そうした八雲の内面生活を、おびただしいかれの書簡と新資料によって辿ろうとしたのが、この伝記であります。

八雲は生涯のうちに何千通という手紙を書いた、まれに見る多産なレター・ライターでしたが、今回の作品集には書簡篇をはぶいたかわりに、この伝記をそれらの書簡の引用によって編みましたから、読者は内外ともに波瀾に富んだ八雲の経歴をたどりながら、作品ではうかがえないハーンの偽りない肉声を聞くという、いわばソノラマ版のような微妙な感銘をえられるにちがいないと信じます。写真資料もできるだけ豊富に入れることにしました。

一八九一年（明治二十四年）　41歳　二月小泉節と結婚。五月、北堀町塩見縄手に転居。現在「史蹟小泉八雲旧居」として保存されているのが、この家である。――十一月、熊本高等学校に転任。

一八九三年（明治二十六年）　43歳　この年十一月、長男一雄生まる。

一八九四年（明治二十七年）　44歳　Glimpses of Unfamiliar Japan「日本瞥見記」出版。大部分は松江時代に執筆し、「大西洋評論」に掲載したものを集めて上下二巻にしたもので、ハーンの日本に関する最初の著書である。おりから日本はシナと戦争をおこしたので、列国の関心は日本にあつまり、この日本印象記は広く世界の国々で読まれた。――この年、熊本高等学校との契約期限が満了したので、授業時間の過重に懲りていたハーンは、「神戸クロニクル社」の招きに応じ、またもとの新聞記者生活にもどった。十一月、熊本を去って神戸に移る。

一八九五年（明治二十八年）　45歳　Out of the East「東の国から」出版。日本人気質を書いた名著として、世界に喧伝される。――冬、帝大教授チェンバレンを通じ、文学部長外山正一から講師に招聘される。教壇生活は熊本時代の酷使に懲りていたので、八雲は迷ってすぐには承諾しなかった。翌年になって、再三の勧請に、ようやく踏み切ったのである。

一八九六年（明治二十九年）　46歳　二月、帰化して日本人となり、小泉八雲と改名する。八月上京。東京牛込市ガ谷富久町に寓居を定める。Kokoro「心」出版。

一八九七年（明治三十年）　47歳　Gleanings in Buddha Fields「仏の畑の落穂」出版。二月、二男巌生まる。夏、静岡県焼津へ海水浴にいき、富士登山をした。焼津の純朴な漁村気分が気に入って、夏の休暇は毎年ここで暮らした。

一八九八年（明治三十一年）　48歳　Exotics and Retrospectives「異国風物と回想」出版。

一八九九年（明治三十二年）　49歳　In Ghostly Japan「霊の日本」出版。

一九〇〇年（明治三十三年）　50歳　Shadowings「明暗」出版。十二月、三男清生まる。

一九〇一年（明治三十四年）　51歳　Japanese Miscellany「日本雑記」出版。

一九〇二年（明治三十五年）　52歳　この年三月新宿区西大久保に、庭のやや広い手ごろな家を買い、書斎を増築してここに移った。Kotto「骨董」出版。

一九〇三年（明治三十六年）　53歳　三月、帝大講師を突然解雇された。これには裏面にいろいろ当局側の不手際があったので、八雲は激怒した。世界の同情は八雲にあつまり、列国の新聞は日本政府の忘恩的仕打ちを責め、英米の大学から八雲を講演に招聘する手がさしのべられたが、八雲は健康もすこし害していたので、それらの招きをすべてことわり、そのかわりに講演の材料を書物に著わすことにし、ひじょうな意気ごみで著述にとりかかった。日本に関する卒業論文といわれる名著「日本」がそれである。この年九月、長女寿々子生まる。

一九〇四年（明治三十七年）　54歳　名著「日本」を脱稿すると同時に、早稲田大学文学部の講師に聘せられた。夏、焼津に遊ぶ。九月帰京。学校が開講してからまもなく、九月十九日、自宅で心臓の発作が起ったが、このときは無事におさまり、越えて二十六日、二度目の心臓発作のため自宅で急逝した。法名「正覚院浄華八雲居士」。九月三十日、市ガ谷瑠寺にて葬式を営み、同日、雑司ガ谷墓地に葬った。この年、Kwaidan「怪談」、Japan「日本」出版。八雲はこの本を見ずに死んだ。

七年）に英米で出版されたとき、アメリカは、当時日露戦争後の新鋭国日本の研究のために、これを陸海軍士官の教科書に採用し、また今次大戦の際にも、青年士官の必読の書として推薦したという事実を見ても、この書が永遠の名著であることがわかります。わが国では、戦時中、この本は軍部の血ぬられた手によって、まちがった意味での国威発揚の宣伝に悪用されました。

外国人の書いた日本国民精神史として、群書中の白眉であるこの本は、今こそもういちど新しい目をもって改めて読み直されるべき時かとおもわれます。この本を味読、批判することは、とりもなおさず、われわれ日本人の心と肉体のなりたちに思いを致すことであり、国際人としてのわれわれを形づくっていく上に、多くの示唆と指針をあたえてくれるものと信じます。とくに若い世代の方々に、ぜひ一読していただきたいものだとおもいます。

第十二巻　小泉八雲伝〔第十二回配本〕

この日本の大恩人であるハーンの生涯は、その出生からしてすでに特異なものをはらんでいました。富裕な大叔母の手に育てられた、母のない少年時代の傷心、アメリカ時代の苦しい放浪と生活苦にあえいだ青年期、ようやくあこがれの日本に渡来してからの芸文ひとすじの生活――そうした八雲の内面生活を、おびただしいかれの書簡と新資料によって辿ろうとしたのが、この伝記であります。

八雲は生涯のうちに何千通という手紙を書いた、まれに見る多産なレター・ライターでしたが、今回の作品集には書簡篇をはぶいたかわりに、この伝記をそれらの書簡の引用によって編みましたから、読者は内外ともに波瀾に富んだ八雲の経歴をたどりながら、作品ではうかがえないハーンの偽りない肉声を聞くという、いわばソノラマ版のような微妙な感銘をえられるにちがいないと信じます。写真資料もできるだけ豊富に入れることにしました。

入って、夏の休暇は毎年ここで暮らした。

一八九八年（明治三十一年）　48歳　Exotics and Retrospectives「異国風物と回想」出版。

一八九九年（明治三十二年）　49歳　In Ghostly Japan「霊の日本」出版。

一九〇〇年（明治三十三年）　50歳　Shadowings「明暗」出版。十二月、三男清生まる。

一九〇一年（明治三十四年）　51歳　Japanese Miscellany「日本雑記」出版。

一九〇二年（明治三十五年）　52歳　この年三月新宿区西大久保に、庭のやや広い手ごろな家を買い、書斎を増築してここに移った。Kotto「骨董」出版。

一九〇三年（明治三十六年）　53歳　三月、帝大講師を突然解雇された。これには裏面にいろいろ当局側の不手際があったので、八雲は激怒した。世界の同情は八雲にあつまり、列国の新聞は日本政府の忘恩的仕打ちを責め、英米の大学から八雲を講演に招聘する手がさしのべられたが、八雲は健康もすこし害していたので、それらの招きをすべてことわり、そのかわりに講演の材料を書物に著わすことにし、ひじょうな意気ごみで著述にとりかかった。日本に関する卒業論文といわれる名著「日本」がそれである。この年九月、長女寿々子生まる。

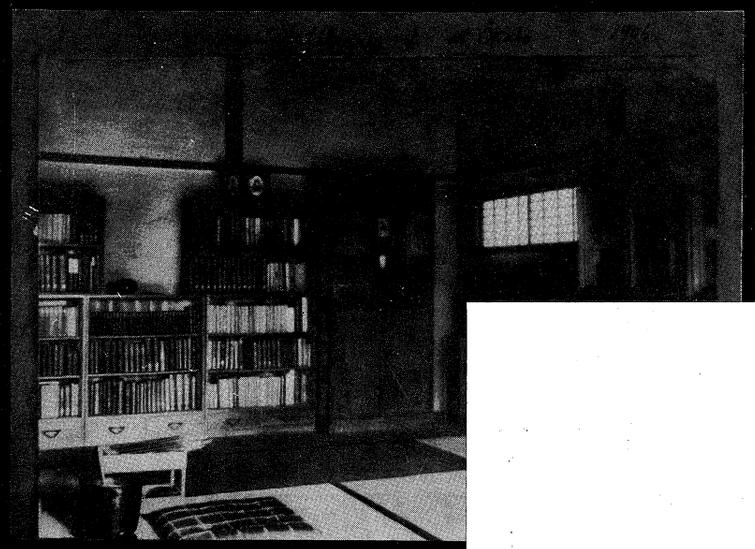
一九〇四年（明治三十七年）　54歳　名著「日本」を脱稿すると同時に、早稲田大学文学部の講師に聘せられた。夏、焼津に遊ぶ。九月帰京。学校が開講してからまもなく、九月十九日、自宅で心臓の発作が起ったが、このときは無事におさまり、越えて二十六日、二度目の心臓発作のため自宅で急逝した。法名「正覚院浄華八雲居士」。九月三十日、市ガ谷瘤寺にて葬式を営み、同日、雑司ガ谷墓地に葬った。この年、Kwaidan「怪談」、Japan「日本」出版。八雲はこの本を見ずに死んだ。

雪おんな

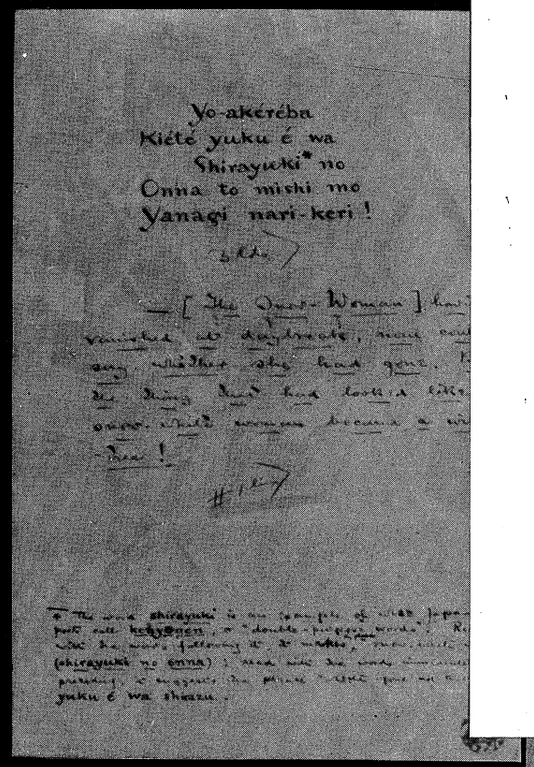
武蔵の国のある村に、茂作、巳之吉という、ふたりの木こりが住んでいた。この話のあったころ、茂作はすでに老人で、弟子の巳之吉は十八歳の若者であった。ふたりは、毎日つれだって、村から二、三里はなれた森へ行く。森へ行く途中に大きな川があって、そこに渡し舟がかかっている。この渡し場のあるところは、これまでにいくたびとなく橋がかけられたのだが、かけるたびに、いつも出水のために橋が流されてしまう。川の水が増してくると、とてもふつうの橋なんぞでは、もつものではなかった。

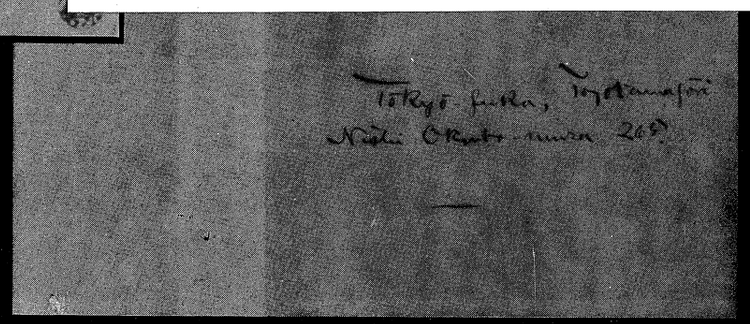
ある寒い夕暮のことであった。茂作と巳之吉とは、山から帰る途中で、ひどい吹雪に会った。吹雪のなかを、ふたりはかの渡し場のところまできたが、船頭は向こうの岸に舟をつないだまま、どこへ行ったか姿が見えない。けれども、とうてい川を泳いで渡れるような日ではなかったので、ふたりの木こりは、とりあえず、渡し守の小屋のなかへ逃げこんだ。ふたりは、どん

な
ん
お
雪



（左）　小泉八雲が用いた西大久保の住居の書斎。名著「日本」の原稿はここで完成された。





予約申込書

恒文社刊

『全訳 小泉八雲作品集』全十二巻

各巻払
一時払　組

右全巻購読を申込みます

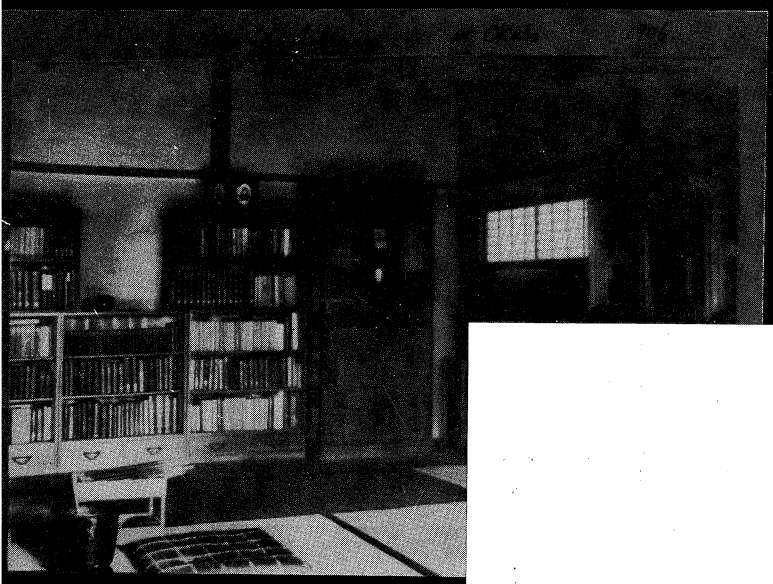
月　日

御住所

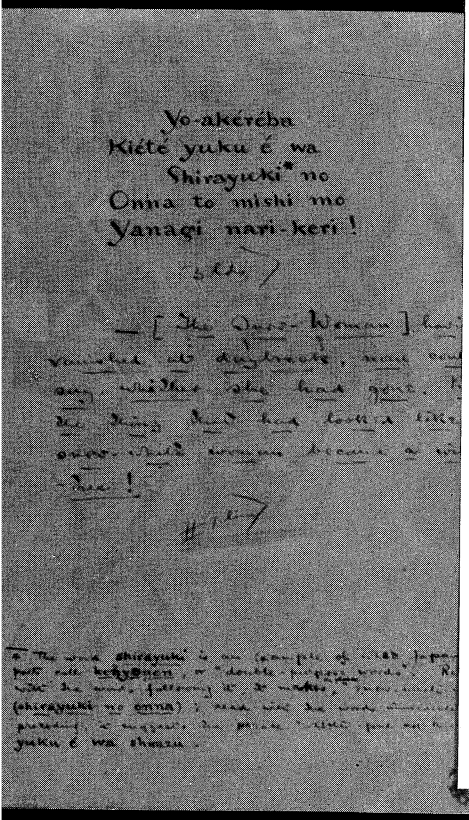
御芳名

書店御中

（掲載の写真はいずれも小泉一雄氏の提供）



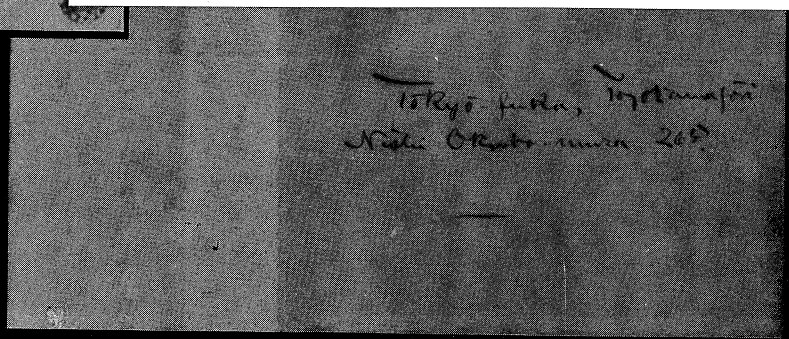
（左）　小泉八雲が用いた西大久保の住居の書斎。名著「日本」の原稿はここで完成された。



Yo-akéréba
Kiété yuku é wa
Shirayuki* no
Onna to mishi mo
Yanagi nari-keri!

— [The Snow-Woman] has vanished like daylight; and as I gazed, behold the form grew, the head bowed, the limbs lengthened, and the snow-white woman became a willow tree!

* The word shirayuki is an example of what Japanese call kokugo, or "double-pronunciation words." Kanji the more pleasing of the readings, shirayuki no onna (shirayuki no onna), was used by the author, presumably to suggest the phrase which follows: yuku é wa shimo.



Tōkyō-fu-ku, Yotsuya-ku
Nishi Ōkubo-mura 265

予約申込書

恒文社刊

『全訳小泉八雲作品集』全十二巻

各巻払
一時払　組

右全巻購読を申込みます

月　日

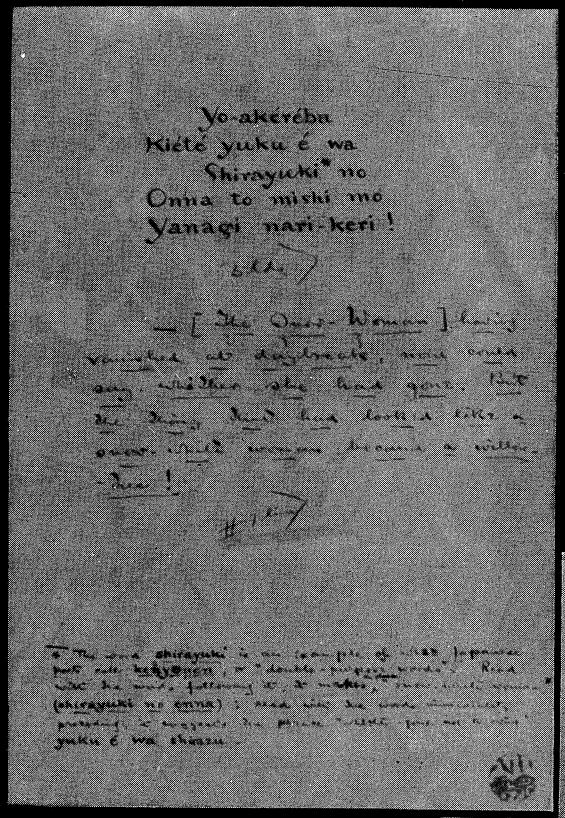
御住所

御芳名

書店御中

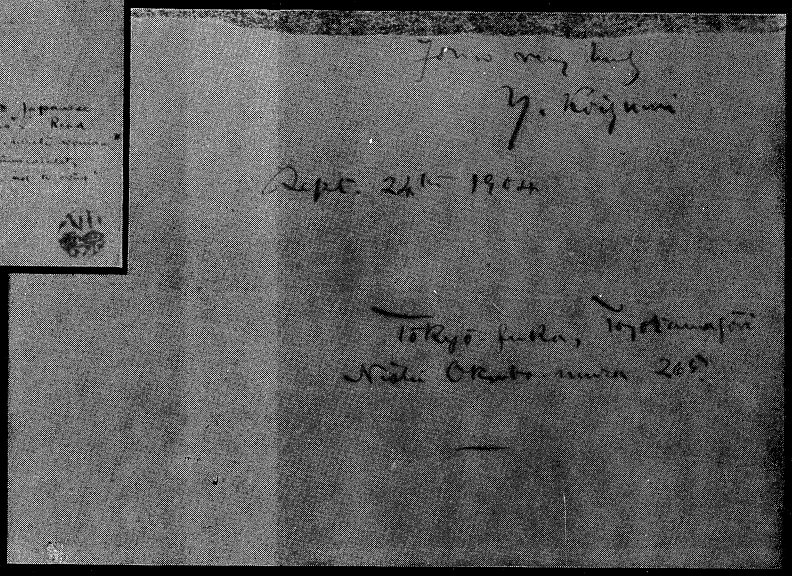
（掲載の写真はいずれも小泉一雄氏の提供）

（左）　小泉八雲が用いた西大久保の住居の書斎。名著「日本」の原稿はここで完成された。



Yo-akeréba
Kiété yuku é wa
Shirayuki* no
Onna to mishi mo
Yanagi nari-keri!

（左）　小泉八雲の手稿。「雪おんな」の一節である。

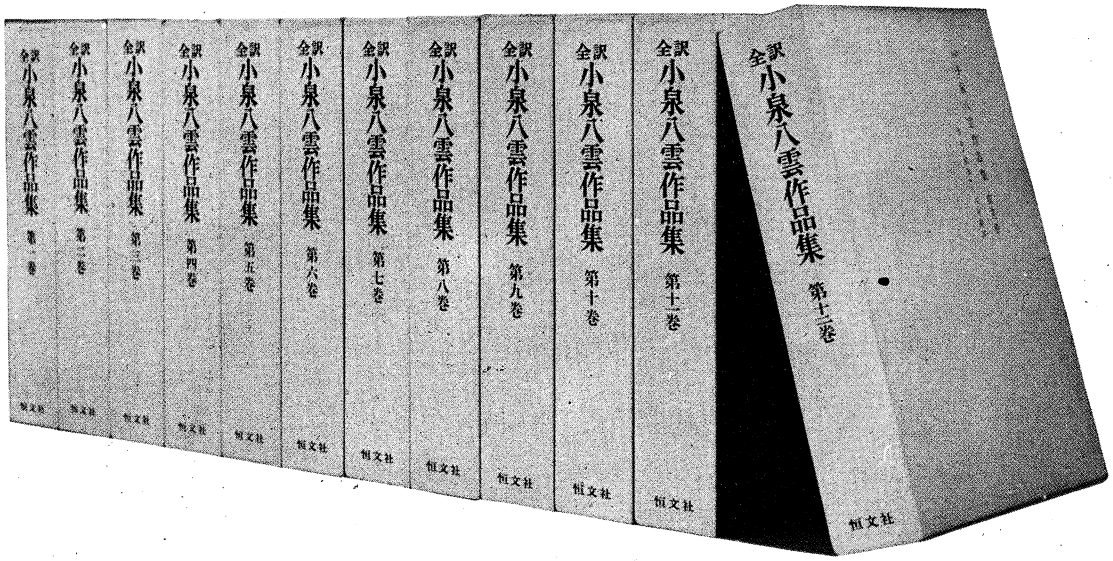


（下）　小泉八雲の手紙の一部。日付は死去2日前の1904年9月24日で、これが八雲の絶筆となった。

（掲載の写真はいずれも小泉一雄氏の提供）

予約募集中

第１回配本　６月20日
第10巻　骨董・怪談・天の川綺譚



予約申込規定

■体　裁
A５判、本クロース（ヤクノー地）装、上製函入、本文上質紙
平均四二四ページ

■巻　数
全十二巻

■定　価
各　巻　一、八〇〇円
全巻一時払い　一九、八〇〇円
（一、八〇〇円の割引）

■申込期限
昭和三十九年七月二十日

■申込方法
申込期日までに、最寄りの書店または直接発行所へお申し込みください。

■配　本
昭和三十九年六月二十日に第一回配本。以後毎月一巻ずつ刊行し、昭和四十年五月に完結する予定です。

恒文社
ベースボール・マガジン社の姉妹会社
東京都千代田区神田錦町３の21／振替口座　東京35824
大阪支社・大阪市北区真砂町53　書協ビル